＜前回・ハイデッガーとキリスト教＞

０．キリスト教思想にとって、哲学はいかなる意味を有しているのか。
　　キリスト教思想にとって、ハイデッガーは何者か。

１．ハイデッガーとキリスト教との関係をめぐる問題の整理（『続・ハイデガー読本』法政大学出版局、2016 年。「コラム⑥」バルト、ブルトマン、ティリッヒ　ハイデガーと二十世紀神学）

（１）問題・概観

３．Judith Wolfe, *Heidegger and Theology*, T & T Clark, 2014.

４．研究対象と研究との錯綜した関係について。

５．こうして、研究史をまとめるのは、思いの外、難しい作業になる。
　きわめて重要であるにもかかわらず、「ハイデッガーとキリスト教」というキーワードによる表面的な調査（検索）においては見落とされる可能性があるものである。

６．辻村公一「ブルトマンとハイデッガー―信仰と思惟―」（『ハイデッガー論攷』創文社、1971 年、の附録一）。

（２）諸動向について

８．隣接分野（宗教哲学・現代思想）との差異化と整理方針

・隣接分野におけるハイデッガー論との差異化による、キリスト教思想の独自性の解明。
　　フランス、イタリア、最近のアメリカ（カプート）はキリスト教というよりも宗教哲学

・動向の整理の視点：世代／地域／教派

９．同時代（1920 年代～ 1960 年代）、次の時代（1950 年代～ 1980 年代）、
　さらに次の時代（1990 年代以降）

10．ドイツ

Otto Pöggeler, *Philosophie und Herneneutische Theologie. Heidegger, Butlmann und die Folgen*, Wilhelm Fink, 2009.

1）同時代：バルト、ブルトマン、ティリッヒ、ボンヘッファー 、
　　『存在と時間』（1927）に至るハイデッガーが焦点。

2）ブルトマン学派、フックス、エーベリンク、ユンゲル
　　中期以降のハイデッガー

3）ブーリ、オット（『思考と存在――マルティン・ハイデガーの道と神学の道』白水社、1975年）、パネンベルク

11．同時代のドイツ神学

・バルト：KDIII/3（S.395）　→　拒否

・ブルトマン：1920 年代の思惟（*Glauben und Verstehen I*, J.C.B.Mohr, 1933）で、
　　Existenz 概念を使用。Welchen Sinn hat es, von Gott zu reden ?（1925）

・ティリッヒ：*Die sozialistische Entscheidung*, 1933 (MW.3)
　基礎的人間学：社会的構想力　→ 政治思想の二つの系譜
　「世界―内―存在」（「自己―世界」、「運命―自由」）「被投性―企投」
　「起源―要請」、起源神話とその突破（預言者、ヒューマニズム）→　起源の両義性
　　実体原理（形成原理）と修正原理（批判原理）
　　↓
　　政治的ロマン主義（保守的あるいは革命的）とその意義
　　自由主義・社会主義とその限界
　　↓
　宗教的社会主義の課題：社会主義と起源の力の再統合、合理性と非合理性

・ボンヘッファー：現代キリスト教神学の文脈におけるハイデッガー

Akt und Sein. Transzendentalphilosophie und Ontologie in der systematischen Theologie, 1931.

12．英語圏、日本、そのほか

16．キリスト教思想はハイデッガーの何に注目してきたのか。

1)哲学的人間学としてのハイデッガー（『存在と時間』）

・バルト、ブルトマン、ティリッヒ、ボンヘッファー

世界内存在＝時間性、本来性と非本来性

・近代キリスト教思想におけるハイデッガー：ティリッヒ、ボンヘッファー

神学のパートナーとしての哲学

2)言葉の出来事、イエスの譬え：

3)存在理解、真理理解

存在の歴史性、存在と存在するものの存在論的差異の理解

真理の歴史性（ティリッヒの「真理の動的理解」）

ティリッヒ（カイロスにおけるロゴス。Kairos und Logos, 1926）

↓

類似しているのは偶然ではない。時代と伝統の共有。

（３）まとめ・評価

17．キリスト教神学の側でハイデッガー哲学に関心をもつのは、次の二つの場合。

ハイデッガー哲学が、人間学として、あるいは言語理解において、キリスト教思想にとっても有益である。

ハイデッガー哲学は、表面的には無神論的と見えても、実はキリスト教あるいは聖書の思想と緊密な関連がある。否定神学あるいは神秘主義の系譜でハイデッガーを理解する。

18.「ハイデッガーとキリスト教」とをテーマ化する上で問題となるのは、両者が表面的な断絶にもかかわらず根本的なレベルで緊密に結び付いているという研究者の予想である。キリスト教研究者が「ハイデッガーとキリスト教」を論じる際に、しばしば前提とされているのは、この予想であり、それを展開するために設定される設問が、神（々）、存在、言葉、存在史、人間理解、そして否定神学、神秘主義などなのである。しばしばこうした問いの立て方は循環論法に陥ることになる。

19．しかし、いずれにせよ、ハイデッガーと同時代以降のキリスト教神学との間に、単純な影響関係などを想定するだけでは、奥行きのないつまらない議論になる恐れが多分にある。むしろ、ハイデッガーと現代キリスト教思想とは同じ伝統（この伝統に、神秘主義、否定神学、言語論、人間理解などが属している）と歴史時代を共有していることから、両者の関係を考えるべきである。

20．Paul Tillich, "Heidegger and Jaspers,"(1954) (Alan M. Olson (ed.), *Heidegger & Jaspers*, Temple University Press, 1994, pp.16-28.)

19．マルレーヌ・ザラデル『ハイデガーとヘブライの遺産――思考されざる債務』

「言語の特殊な実践（釈義や言葉の上での遊び）が問題あるにせよ、存在との関係における言語の関係が問題であるにせよ、対話としての言語の展開が問題であるにせよ、あるいはまたこの対話が真に成就される場としての媒介者が問題であるにせよ、本章では、言語へのハイデガー的なアプローチと、聖書ならびにそれを援用する伝承が証示するようなアプローチとの決して当然のことならざる類似にわれわれが直面していること、この点を示そうと努めたのだ。・・・ここで困惑を引き起こすもの、それは類似そのものではなく、この類似を包み込む沈黙である。」(83)

13．ハイデッガーと解釈学的神学２

（１）ブルトマン学派

１．ブルトマン学派、1950 年代～ 60 年代、聖書学から教義学へ。
　　フックス、エーベリング、リンネマン、ユンゲル
２．後期ハイデッガーと言葉の出来事
Das Sein als Geschick, das Wahrheit schickt, bleibt verborgen. Aber das Weltgeschick kündigt sich in der Dichtung an, ohne daß es schon als Geschichte des Seins offenbar wird. (Wegmarken, 339)
　真理（Wahrheit）は客観化され普遍される超時間的なものではなく、自らを隠しつつ顕わにする存在の歴運（Geschick）において、自らを出来事として生起（性起　Ereignis）する。
　　↓
　時間・歴史が意味や真理の領域に属する。この真理の歴史的生成の中で、人間の真理への応答がなされる。
　　Ｏ．ペゲラー『ハイデッガーの根本問題――ハイデッガーの思惟の道』晃洋書房。
　　辻村公一編『ハイデッガーと現代』創文社。
　　ハイデッガー全集解題（大橋良介）、ハイデッガー命題集

（２）解釈学と神学
３．聖書解釈と哲学
・聖書解釈学の意義：規範的・典型的あるいは特殊的（リクール）
・神学と哲学との相互連関：
「一九六〇年代に表面化したキリスト教内の神学運動は、人類の生活のこのような世界史的変化に対応しようとする哲学運動と密接に関連している」（森田、33）、「哲学思想の動向を考え合わせて整理するなら、六〇年代以後に現われた新しい神学動向のうち有意義と思われるものだけを挙げるならば、次の四つの流れに大別されるであろう。
　一、解釈学としての神学
　二、歴史の神学（宗教学・宗教史の神学、科学論の神学）
　三、希望の進学・革新の神学（解放の神学）
　四、プロセス神学」（35-36）
　　解釈学、批判的合理主義、フランクフルト学派、プロセス哲学」
４．ブルトマン
　「理解しようとするような一切の解釈の前提は、テキストのなかで直接あるいは間接に語られている事柄への、そして問いの Woraufhin を導く事柄への前もって持っている生の関係である。・・・すべての解釈は、問題になっていたり、あるいは問われていたりする事柄についてのある確かな先行理解によってひ必然的に支えられている。」（「解釈学の問題」、『神学論文集Ⅱ』新教出版社、298）
　「聖書の学問的解釈の場合は、その Woraufhin は、聖書のなかで表わされている、人間の実存の理解を問うことのうちに見出される。」(305)
５．リクール
　解釈学：回り道・間接的表現を経て自己へ。象徴から言語そしてテキスト、隠喩
　・「解釈学とは、テキスト解釈との関連における、了解の操作の理論である」（「解釈学の課題」、『解釈の革新』白水社、143）
　・個別的解釈学から一般解釈学へ：シュライアマハー、ディルタイ
　・認識論から存在論へ：ハイデッガー、ガダマー
　・解釈学と批判主義、ガダマーとハーバーマス
　・哲学的解釈学と聖書解釈学
　　トンプソン『批判的解釈学――リクールとハーバマスの思想』法政大学出版局。
　　塚本正明『現代の解釈学的哲学――ディルタイおよびそれ以後の新展開』

世界思想社。

（３）解釈学的神学の試み→ポストモダンへ（後期）

６．イエスとパウロの関連性

イエスとパウロ（新約聖書神学の前提と新約聖書神学自体）との分裂、さらには、旧約聖書神学と新約聖書神学との分裂、という事態に対して。

「譬えという言葉の出来事」と「信仰義認論という言葉の出来事」という仕方での関連づけ（ユンゲル。 Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus*, J.C.B.Mohr, 1962）

７．小田垣雅也

「解釈学的神学が意図していることは一つの哲学的神学の建設である」（小田垣１、4）

「神の啓示と、それをうけとる人間の主体性の関係」

「神学と哲学とを橋わたししようという努力」

「神が開示、即ち啓示される出来事から出発する神学」(11)

「キリスト論の競合的要素の一方を落としたキリスト論を閉鎖的キリスト論と名づける」(19)

「主観―客観構図による神認識を超克するそれぞれの努力」(小田垣２、170)

上からのキリスト論：バルト、啓示から、神の子・受肉

下からのキリスト論：自由主義神学、パネンベルク？、歴史・経験から、人間イエス

キリスト論の循環構造：存在の順序と認識の順序、問いと答えの循環（循環の出来事的生起）

８．聖書解釈学の現場より、議論を再構築すること。

聖書解釈という営みは何か？

９．ポスト近代を自覚的に生きる哲学

・啓蒙主義（啓蒙主義的な普遍的理性・認識論的）以降

・形而上学的思惟以降：ニーチェとハイデッガーのラインで

・制約された自由、媒介された思惟　→　全包括的で絶対的に確実な直接知の断念
弱い思考

・表現を介した自己への接近：歴史性あるいは伝統

10．ポストモダンではあるが、モダンの帰結でもある。

シュライアマハーの転換の帰結：教義学から信仰論へ

言語性と解釈史

↓

ポストモダンの思想状況で、神学的知はいかなるものであり得るか。

（４）ヴァッティモの場合

11.「弱い思考」

多元性、歴史性という前提における思考

12．絶対的で唯一の思考の枠組みとしての形而上学（＝強い思考）は成り立たない。

13．しかし、相対主義という無思考性でもない。

＜存在＞の歴史への信頼

キリスト教的、神の創造と摂理

14．ヴァッティモ「弁証法、差異、弱い思考」（『弱い思考』法政大学出版会。）

「「強い」思考、推理を演繹的に進めていかざるをえない思考」（10）

「わたしたちが出発点とすることのできる経験」「概して日常的な経験」（10）、「歴史的な性質を付与され濃密な文化の累積を支えとする経験」、「＜現存在＞は被投的な存在」(11)

「部分的でない観点、ひいては全体を全体としてつかみとることのできる観点」（12）

「進歩への信仰」（14）、「単一の直線としての歴史は、勝者の歴史にすぎない」（15）、「弁証法や統一性そのものを犠牲にしても、批判的要請を妥当させようとしたこと」（16）
「形而上学を形づくっている強い構造」（18）
「出来事性」（21）「存在（という概念）が弱体化し、その時間的本質が明白になったということ」（22）、「差異の思考が弱い思考へと屈曲する」（23）
「存在の安定した構造の終焉」「神は存在するとか存在しないとか言明するあらゆる可能性の終焉」、「屈曲は、伝達と運命＝送付というように解された存在の真理を思考するさいの仕方」（24）
「追憶のなかでのみ接近する」（25）、「その遺産へと、あつて生きてきたものの痕跡に起因するピエタース」（26）
「価値の転倒はわたしたちの歴史の次の諸世紀を満たす運命にあるのだった」（26）
「真理の地平、もろもろの命題の検証と反証が可能になる領域を開くのは、伝達であり、運命＝送付である」、「わたしたちが遺産として受けとってきたものにたいするピエタースの力」、「尊敬の感情」（30）
「ピエタースも歴史的に異なっている」、「解釈学のさずさわる、この仕事」、「心理の概念についての弱い存在論」（31）、「真理の「修辞学的な」とらえ方」（32）
「思考に付与してきた主権性の立場をもはや要求できなくなる」（32）、「思考そのものの投企力の減少を理論化すること」（33）、「存在を伝達および記念碑として思考する弱い存在論」、「伝承させる世襲財産は、単一の総体ではない」（33）
「勝者たちの歴史が積み重ねてきた廃墟」「これらの廃墟へのピエタース」（34）
「新しいものを他の文化としての他のものと同一視すること」、「超形而上学的な人間性を準備すること」（34）

15.『哲学者の使命と責任』

１）「哲学と科学」

「形而上学にかんするハイデガーの議論の意味するところをガダマーはほんとうには受けいれようとしていないこと」、「ガダマーがハイデガーの形而上学批判を受けいれるのは、なによりも科学主義ないし科学客観主義にかんしてである。ハイデガーのいう真の意味での＜存在＞の歴史といったものはガダマーの念頭にない。」（13）
「わたしはハイデガーと同じく、科学を現代における＜存在＞の運命の本質的な一側面であるとみているからである」（14）
「世界像は本質的に複数の像に転化する」（15）
「これらはすべて＜存在＞の命運にかかわる出来事である」（16）
「ガダマー」「相対主義とヘーゲル主義の中間に立ち止まってしまっている」（20）
「弱い思考こそヘーゲル主義に取って代わることのできる唯一のオルターナティヴなのではないだろうか。もし理性の最終的自己確証に向けての過程がないとしたら、あとには弱い存在論という着想しか残らないのだから」（21）
「もしなんらかの純粋な相対主義に陥ってはならないとするなら、しかしまた他方、ヘーゲルから究極的絶対性の理念、すなわち完全な自己意識という理念を奪い去ってしまったなら、なにを代わりに置けばよいだろうか。運動の原理に転化した[「存在」と「存在者」の]存在論的差異の原理に訴える以外にないのではないか」（22）
「存在者の直接性を乗りこえてなにか別のものに向かうひとつの仕方」「おそらくはもっと「完璧な」かたちで、科学はまさしく＜存在者でない存在＞を代表している」（24）
「「絶対主義的な」存在論、すなわちヘーゲル的な存在論」（25）
「「どんなもの」は複数存在すると主張する者、すなわち、「なんでも可」というテーゼを主張する者には、他のテーゼを主張する者たちよりも多くの道理があるということなの

だ」(27)
「弱体化してきた存在の歴史」(28)

２)「哲学、歴史、文学」

「レトリックとしての真理」「真理は」「説得の問題である」、「哲学が使用する論法は複数の人間を相手にした論法であって」、「説得によって明らかにされる真理なのである」、「人びとが広く分かちあって前提から出発して解釈しようという提案」(41)
「哲学において問題となる真理は複数の人間を相手にした説得の成果であるが、ハイデガーのいう＜存在＞の歴史への一定の信頼にもとづいている」(42-43)
「＜存在＞の歴史への信頼」、「それらがそのような古典に転化してしまったという事実はわたしをも渦中に巻き込んでいる。わたしというは存在は大部分、古典が執拗に存続しているおかげで生まれたものなのだ」、「ガダマーが先入見の果たす積極的な意味での根源性を主張し、客観的精神の意義を強調しているのは、一理あることだった。わたしが結局ふたたびキリスト教信者になったのも、同じ理由による」、「歴史にはなにか神のようなものが存在する」(43)
「自分たちは神によって造られた存在であるという意識とでも呼んでよいもの」、「わたしたちは自分の力でこの世に存在しているわけではなく、他の者たちのおかげでこの世に生を享けている。そして、この事実こそわたしに遺贈された財産なのだ。この世で唯一わたしが手にしている大切な財産なのである」(44)
「教化としての建設には知の累積していくという意味も込められている」、「哲学が関係するみずからの過去は最終的に確定された土台としての過去ではなく、つねに新たな解釈へ開かれている可能性の総体としての過去」(45)
「研究の伝統」「この意味では哲学と文学的解釈学と科学には連続性がある」、「じっさには事件の場合にも、そこで使用される言語や実験方法は歴史的に規定されているという問題が生じる」(46)
「科学の「歴史を超越した」姿勢は存在論の立場と区別がつかなくなってしまう」、「歴史に注目しすぎると、存在論から遠く離れたところへ運ばれていきかねない。これは解釈学にたいして構造主義者が突きつけてきたおなじみの異議である」(47)
「エアアイクニス[性起]としての＜存在＞というハイデガーの概念」「＜存在＞がほんとうにエアアイクニスであるなら、そのときには＜存在＞そのものが歴史であり時間であり出来するものであることになるのだ」、「歴史が存在者に特有のものであるというのは真

実である。が、逆説的なことにも、存在者に注目しすぎると、存在者そのものを非時間的なもの見なすようになる」(48)
「神の死についてのニーチェの告知」、「神の死というのはむしろ、わたしたちが巻き込まれているもろもろの出来事の経過を見やって、大胆にも「神はもはや必要でない」と認めてみようと解釈したものなのだ。「神は死んだ」という告知は、科学と技術のおかげて原始人が感じていたような恐怖なしに生きられる世界では神はもはやなくてもかまわない、と人びとが広く認めていることの証にほかならない」(49)
「ニーチェの解釈で神がもはや無用の嘘であることが露わなるのは、ほかでもない神への信仰によってわたしたちの個人的・社会的な生活になかに導き入れられてきたもろもろの変容によるものなのであった。つねに安定と安心の原理として機能してきた神は、つねに嘘を禁じてきた神でもある。だから、信者たちが「神が存在するというのは嘘である」と言明するのも、神の命令にしたがってのことなのだ」(50)
「真理の経験を本質的に解釈的なものであると認めるのはそれ自体がひとつの解釈であることが認められる。また、真理が歴史的なもの（地平的なもの）であるという理論はそれ自体がひとつの歴史的な真理として受けいれられるのである」(51)

「わたしがわたしという存在について意識しているときにはわたしはすでに変わってしまっている」、「「わたし」は、わたしという存在であるのに加えて、わたしという存在についての意識でもある」、「この点こそ現象学や弁証法などカント以降の哲学すべての根底をなす要素にほかならない」、「これはまた解釈学の前提でもある」、「進行する事物とそれを不完全なかたちで記述するフレーズからなる総体」(52)
「完全なニヒリズム、「いっさいが解釈である、そしてこういうふうに言っているのも解釈である」という立場の方のほうがまだましである」(54)
「自己意識はけっして事物の状況に適合した記述になることはない。それ自体がつねにゲームに巻き込まれてしまっているからである。解釈学的な解釈概念だけがなんとかこれを考慮に入れている」(54)
「追跡しているのは記述の客観性という概念についての解釈であって、記述の客観性そのものを拒否しようとする態度ではないということができる」(55)
「科学的研究によって可能なものになった技術の使用にかんする問題は、ハイデガーがいつも言っているように、「技術の問題ではない」ということである」、「それが人間生活一般におよぼす効力と「波及力」のことであるとするなら、技術自身の問題ではないのだ」(56)
「わたしはハードな科学、実験科学の領域において起きることも存在の歴史なのだとみる観点のうちに自分を位置づける。そして存在の歴史にとって肝要なのは言語的メッセージ、文化的メッセージの伝達である」、「科学のほうが客観性の基準の変化のリズムが緩慢であるということができるにすぎない。科学の場合には、基準は長期にわたって緩やかに変化していく」
「哲学はわたしたちが日常的に展開している言語活動の自己意識である。より正確に言えば、メタ言語活動の自己意識なのだ。そして、そうしたメタ言語活動の内部に個々の言語活動はすべて位置していて、そこにおいてそれぞれの安定性を得ているのであり、時と場合によっては変化をこうむっているのである」(57)
「自然科学とも精神科学とも異なったまったく別のなにものかでありながら、しかもその両者のうちに含まれている。「ハードな」科学といえども解釈的な学だからである。解釈的な知であって、たんなる記述的な知ではないのだ」、「客観性自体も＜存在＞の歴史のうちに位置しており、＜存在＞の歴史に所属しているにすぎない」(58)
「事物の布置関係の内部にあって構築された客観性」、「「自然的な」客観性は「文化的な」客観性でもあるのだ」(59)
　形而上学という枠から、存在の歴史、メタ言語の自己意識への緩める。

３）「哲学における論理」
４）「真理を語る」
「神が死ぬように真理も死ぬ、とわたしにははっきり言える。そして、キリスト教で神の死（そして誕生）は神のひとつの側面であり、神の本性の一部をなしているのとまったく同じように、矛盾した真理の死も真理の本性の一部をなしているのである」(94)
「＜存在＞の歴史はもろもろの出来事でできあがっている」、「それらは」「「偶発的な事故」ではない。それらは＜存在＞の性起なのだ。真理は、その歴史とともに、こうした＜存在＞の性起のひとつなのであって、振り払おうとしても無理なのである」(95)
５）「哲学への召喚と哲学の責任」

＜参考文献＞
１．ブルトマン「解釈学の問題」(『ブルトマン著作集』12、新教出版社)
２．ガダマー『真理と方法』法政大学出版会。

３．リクール「解釈学の課題」「疎隔の解釈学的機能」「哲学的解釈学と聖書的解釈学」(『解釈の革新』白水社)
４．Ｅ．ユンゲル『パウロとイエス』新教出版社。
５．森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』教文館。
６．小田垣雅也『解釈学的神学』『哲学的神学』『知られざる神に――現代神学の展望と課題』創文社。
７．ジャンニ・ヴァッティモ『哲学者の使命と責任』法政大学出版会。
８．ジャンニ・ヴァッティモ、ピエロ・アルド・ロヴァッティ編『弱い思考』法政大学出版会。
９．Richard Rorty, Gianni Vattio, *The Future of Religion*, Columbia University Press, 2005.
John D. Caputo, Gianni Vattimo, *After the Death of God*, Columbia University Press, 2007.
Gianni Vattimo, Santiago Zabala, *Hermeneutic Communism. From Heidegger to Marx*, Columbia University Press, 2011.
10．Thomas G. Guarino, *Vattimo and Theology*, T & T Clark, 2009.
11．佐藤啓介「ジェンニ・ヴァッティモの宗教論――神の死以降の愛論の可能性」（宗教哲学会『宗教哲学研究』No.29 2012、昭和堂、57-69頁）
12．茂牧人『ハイデガーと神学』知泉書館。
13．ディディエ・フランツ『ハイデッガーとキリスト教　黙せる対決』萌書房。
14．解釈学と神学、弱い神、アメリカ
・John D. Caputo, *More Radical Hermeneutics*, indinia University Press, 2000.
, *On Religion, Routledge*, 2001.
, *Philosophy and Theology*, Abington Press, 2006.
, *The Weakness of God. A Theology of the Event*, Indiana University Press, 2006.